

## 自己評価報告書

平成 23 年 4 月 1 日現在

機関番号：10101

研究種目：基礎研究（A）

研究期間：2008～2011

課題番号：20243033

研究課題名 発達障害が疑われる非行少年の包括的再犯防止対策

研究課題名 Repeat offender prevention program for delinquent juvenile with developmental disorders

研究代表者

田中 康雄 (TANAKA YASUO)

北海道大学大学院教育学研究院・教授

研究者番号：2017803

研究代表者の専門分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：

(1) 児童自立支援施設 (2) 発達障害 (3) 自立援助ホーム (4) 非行 (5) 生活 (6) 再犯防止

## 1. 研究計画の概要

本研究は、児童自立支援施設と退所後に復帰する地域を対象とし、①施設に暮らす子どものアセスメント ②施設機能の検証③再非行防止のための心理教育プログラムの開発と効果測定 ④地域社会での自立を保障する地域環境作りの4段階の研究開発することで、発達障害が疑われる子どもたちへの包括的な再犯防止対策を構築することを到達点とし、A. 児童自立支援施設 子ども調査、B. 児童自立支援施設 職員調査、C. 心理教育プログラム検討、D. 地域環境調査・整備の4つの研究から構成される。

## 2. 研究の進捗状況

(1) 調査は、人権重視の立場から子ども調査のまえに、職員対象の調査を実施した。

2008年は、北海道立大沼学園、北海道立向陽学園、北海道家庭学校、国立武蔵野学院、国立きぬ川学院、大阪府立修徳学院、大阪市立阿武山学園の7つの児童自立支援施設と、ふくろうの家（函館市）、東樹園（京都市）、そらまめ（大阪市）、の3つの自立援助ホーム職員に聞き取り調査を行い、職員の子どもの育ちの視点を聞き取ることができた。そこには、職員個々に培ってきた子ども観や人生哲学とも呼べる理念が存在していた。また施設として、業務量の増加や労働条件の改善点、組織観や職員の家族観、教育観の変貌など多岐にわたる問題点も確認できた。さらに、自立援助ホームの実践を聞き取る中では、児童自立支援施設を出院したあと地域社会で生きることの困難さは予測できたが、改めてそばにいる大人が理解と励ましを与え続けることで、たくましく社会で生活する者、あるいは家庭をもとうと努力する者が生まれ、地域社会での自立を保障する地域環境作り

の重要性を聞き取ることができた。

(2) 2009年はこの結果をもとに全施設へのアンケート調査内容を吟味し実施した。2009年度内にその結果を速報版として各施設へお返しすることができた。インタビュー同様に、そこには、生活を支援する、あるいは生活を共にする職員の覚悟が読み取れた。また、児童自立支援施設が、過去の教護院時代とは質の違う児童を多く受け入れ、変容を迫られていることが窺われる一方で、児童自立支援施設が持つ、集団の力を存分に利用して、自立支援をしていくという基本を維持して行きたいという意思も強く感じ取れた。

そのうえで、改めて強調されたのが、社会的養護にある子ども達と育てる職員との生活空間における関係性の構築の重要性であると思われた。

(3) 2010年は、これまでの調査施設が夫婦小舎性の箇所であったため、交代制の施設への聞き取りを改めて行うとともに、これまでの成果を発表するため、関西（於、京都の花園大学）と関東（於、埼玉の武蔵野学園）の2カ所でフォーラムを開催した。その意図は、外からの意見や考えを取り組み、相互交流を図りながら最終的な研究結果につなげていこうと考えたからである。両フォーラムともに児童自立支援施設に長年勤めておられた先生に基調講演をお願いし、その後、研究員の研究報告、シンポジウムという企画で実施した。関東、関西の2箇所で開催を行った。それを今回とりまとめ報告書として、関連施設等へ配布した。

## 3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している

(理由)

当初は、児童自立支援施設にいる子どもたちのな

かでも「学びなおしと育ちなおし」が困難と思われる発達障害のある子どもたち（その多くは被虐待体験もありますが）を対象に、①施設に暮らす子どものアセスメント ②施設機能の検証 ③再非行防止のための心理教育プログラムの開発と効果測定 ④地域社会での自立を保障する地域環境作りの4段階の研究開発することで、発達障害が疑われる子どもたちへの包括的な再犯防止対策を構築することを到達点としていた。

しかし、調査研究を2年ほど進めていくなかで、改めて強調されたのが、社会的養護にある子ども達と育てる職員との生活空間における関係性の構築の重要性であった。まさに未来を信じるなかで、人が人を護り、育てていく様子が多くの職員から聞き取れた。職員の語りには、職員が子どもたちに対峙するために、それぞれの施設に職員個々が培ってきた子ども観や人生哲学とも呼べる理念が存在しており、まさに生き様を見せた養育でもあった。と同時に、親ではない、短いつきあいのなかでいかに凝集した出合いを示すかに心を砕いている様子も見て取れた。

そこで、本研究は職員へのインタビューと参与観察、さらにアンケート調査から、施設のあるべき姿、子どもたちの抱えている課題、生活を支える保護因子などについての検討を行い続けることで、共に生きる姿、「生活」について考えることへと変化進展した。その意味では、現在までの達成度、当初の計画を変更したなかで、改めて発達障害が疑われる子どもたちへの包括的な再犯防止対策を構築するヒントになるような萌芽にきづきつつあるといえる。

以上の理由から、当初の計画を完全に踏襲しているわけではないが、研究自体が大きく遅れている、あるいは質的な劣化を来しているとは判断できない。むしろ研究深度としては進んでいると判断して達成度を評価した。

#### 4. 今後の研究の推進方策

2011年は本研究の最終年度である。

上記したように、計画最初期から変更点はあるが、それは、研究自体の深度につながり、本研究の目的を揺らがすものではないと判断する。

最終年度は、これまでの聞き取り調査とアンケート調査をもとに、研究者で十分に議論をし、最終報告を取りまとめる予定である。

現状では、順調に進展しているの、無理ではないと思われる。

なお、成果については、書籍の形で刊行公表することを目的とし、すでに出版社との交渉を終えている。

#### 5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

1. 村瀬嘉代子：発達障害の臨床的意義，臨床心理学，発達障害の理解と支援を考える，査読無し，増刊号2号，2010，190-194.
2. 橋本和明：司法領域における面接，こころの科学，査読無し，149号，2010，53-57.
3. 田中康雄：発達障害が示す特性を日常生活で活用すること，子どもと福祉3，査読無し2010，92-101.
4. 橋本和明：非行との関係を考える，臨床心理学，発達障害の理解と支援を考える，査読無し，増刊号2号，2010，183-189.

[学会発表] (計1件)

1. 久蔵孝幸：児童自立支援施設職員の語る現状と課題～自由記述式アンケートの結果より，北海道児童青年精神保健学会，2010年2月21日，北海道大学

[図書] (計3件)

1. 村瀬嘉代子：金剛出版、「新訂増補 子どもと大人の心の架け橋」2010，300頁.
2. 田中康雄：金剛出版、「つなげよう発達障害のある子どもたちとともに私たちができること」2010，257頁
3. 橋本和明：金剛出版、「非行臨床の技術」2011，260頁

[産業財産権]

- 出願状況 (計0件)
- 取得状況 (計0件)

[その他]